

# ◎日韓共催の意義とスポーツの歴史と現状から

■大島裕史

## 1 ワールドカップに対する意識の違い

シドニーオリンピックが終わると、いよいよ次は日韓共催で行われる二〇〇二年のワールドカップである。しかし、本番まであと二年足らずと迫っているのに、雰囲気は今一つ盛り上がらないのが現状ではないだろうか。

ちょうど一年前、朝日新聞と韓国の東亜日報が共同で行った世論調査の結果は、関係者間で少なからぬ話題となった。「日本と韓国で開催されるワールドカップに関心があるか？」という問いに、「ある」と答えた人は日本では五〇%であったのに対し、韓国では大多数の八四%にも達している。この差の理由を探るヒントを、やはり朝日新聞と東亜日報が三年前に行った世論調査にみることにする。

この調査では、「ワールドカップ開催でどんなことを思い浮かべるか」という問いに、日本では「世界レベルの試合が見られる」という回答が最も多く三三%、「会場建設に負担がかかる」の一五%が続く。一方韓国では

「韓国の国際的地位が上がる」という回答が四二%で一番多く、「経済効果が期待できる」の三五%が続く。日本で一番多かった「世界レベルの試合が見られる」は韓国では九%に過ぎず、「日本の国際的地位が上がる」という回答は、日本では八%しかない(表1参照)。

この調査からみえてくるのは、日本はワールドカップを単純にサッカーの世界一を決める大会と考えているのに対し、韓国では世界の耳目が集中する国際大会と位置づけているということだ。したがって、日本ではサッカーに関心がある人でないとワールドカップに関心を示さないが、韓国では関心があるなしに関係なく、「愛国心」的見地からワールドカップに関心を持つ人が多いというわけだ。

韓国でこうした期待は、ソウルオリンピックの記憶がまだはつきりとしていることにあるのではないか。ソウルオリンピックからわずか十二年、近年経済危機に陥ったものの、八八年から九七年までの十年間で、一人当たりの国民所得は二・二倍、自動車登録台数が五・一倍と韓国は豊かになっていった。こう

した数字以上にソウルオリンピックは、軍事独裁で暗いという韓国のイメージを飛躍的に改善させ、オリンピックを成功させたことで、国民にも大きな自信となったことに意味があった。東京オリンピックもまた、戦後日本のイメージを飛躍的に改善させたスポーツ大会であったが、もはや二十六年も昔の話である。

一口に日韓共催と言っても、社会状況や歴史などが違えば、日本と韓国で認識が異なるのも、当然のことである。問題は、お互いの違いをどれだけ理解し合っているかということだ。少なくとも、自分たちの常識で相手を見るのは、間違いのもとである。本番が近づき、より細かい話になればなるほど、相互理解が求められる。率直に言って、何のトラブルもないということはまずないだろう。しかし、そうした問題を解決していくプロセスこそ、真の相互理解につながると思う。

そして、どんなに違いはあるとしても、二〇〇二年のワールドカップは、日韓の友好促進とサッカーを中心とするスポーツ文化発展の絶好の機会であるという認識については、

1—ワールドカップに対する意識の違い  
2—韓国人とサッカー  
3—韓国スポーツ躍進の理由  
4—変わる日韓のスポーツ環境

表-1 W杯開催の効果

○W杯開催で、どんなことを思い浮かべるか? (回答カードから一つ選択)

日本		韓国
33	世界レベルの試合が見られる	9
8	日本(韓国)の国際的地位が上がる	43
14	経済効果が期待できる	35
14	地域の発展につながる	6
15	会場建設などで負担がかかる	5
6	事故や犯罪の心配がある	1
10	その他・無回答	1

※単位%

※96年11月に行われた朝日新聞と東亜日報による共同世論調査より

日本も韓国も同じはずである。

日韓共催が決定して以来、両国の関係は目に見えてよくなってきた。昨年は日本人の韓国への渡航者が史上初めて二百万人を超え、日本人の渡航先としては、ハワイを抜いて韓国がトップになった。韓国では長く禁止されていた日本の大衆文化も確実に開放されつつあり、日本で韓国映画の『シジュリ』、韓国で日本映画の『ラブレター』や『踊る大捜査線』がヒットしている。日韓の隔たりは、とりわけ若い人の間では、あまり感じられなくなってきた。こうした現象を、一時的なブームに終わらせることなく、しっかりと根付かせていけるかが、二十一世紀の日韓関係の重要なポイントとなる。

と同時に、ワールドカップはあくまでもサッカーの大会であり、サッカーあるいは、スポーツの視点も忘れてはならない。そこで、韓国のスポーツを理解するために、その背景にあるものを述べていきたい。

## 2 韓国人とサッカー

韓国のスポーツを語る時、日本の植民地時代の話を避けて通ることはできない。この時代、朝鮮半島のスポーツ選手は日本の全国大会に朝鮮代表として出場した。朝鮮の選手が日本の大会に出ることは、日本の側からすると「内鮮一体」という言葉に象徴される同化政策の意味合いもあったが、支配される側からすると、スポーツこそは日本と正面から戦える数少ない機会であった。

ただ、大半のスポーツでは朝鮮代表として

出るチームは、朝鮮半島に暮らす日本人を中心としたチームであった。しかし、サッカーは朝鮮人のみよってチームが作られた。そして朝鮮代表のチームは、当時最も権威のあった総合スポーツ大会の明治神宮大会など、日本の大会を相次いで制覇した(表1-2参照)。こうした優勝は、抑圧されていた朝鮮半島の人々にとっては誇りとなり、解放後も韓国の人たちの間では、「他のことはともかく、サッカーだけは日本に負けない」と言われ続けた。

こうした背景があるだけに、韓国においては、サッカーでは日本に勝つことは当然であり、負けることは許されなかった。解放後、サッカーで日韓が初めて対決したのは、ワールドカップ・スイス大会の予選として行われた五四年のことであった。この時、反日主義者として知られた、韓国の初代大統領・李承晩は、日本人の入国を拒否したため、二試合とも日本で試合を行うことになったが、日本に向かう選手団の幹部に李大統領は「もし、負けたら玄海灘に身を投げろ」とまで言っている。もちろん、負けたら死ななければならぬわけではないが、それくらいの覚悟が必要であった。この予選では、韓国が一勝一分けで、ワールドカップ出場を決めている。

Jリーグが始まった九〇年代になって、日本も五分の展開をするようになったが、それまでは日本が一方的に負け続け、対戦成績では、日本の十一勝三十五敗十四引き分けとなっている。また韓国は、五六年に香港で開催された第一回アジアカップを制し、六〇年にソウルで開催された同大会も連覇し、アジア

サッカーの盟主としての地位を不動のものとしている。朝鮮戦争後、ポリコゲ(麦峠)麦収獲前の春窮期)と呼ばれる飢えに苦しむほどの貧困の中でもサッカーは、常に希望の星であり続けた。韓国のプロサッカー・Kリーグでは、客の入りが悪い時期もあった。それでもサッカーは、「韓国で最も愛されているスポーツ」と言われるのは、こうした歴史と無縁ではない。

## 3 韓国スポーツ躍進の理由

本稿執筆段階では、シドニーオリンピックはまだ始まっていないが、このところ国際スポーツ舞台での韓国の活躍は目ざましく、日本は完全に押されている状態だ。しかし、六〇、七〇年代までは立場は逆で、サッカーなど一部のスポーツを除けば、日本が圧倒的に優位であった。それどころか、韓国は解放以来長い間、オリンピックでたった一個の金メダルを取るのにも苦労し、アジア大会でも、タイなど東南アジア勢に押されていた。それが、表3、4(次頁)にあるように、八〇年代に入ってから立場は大きく変わるようになる。

韓国がスポーツの強化に本腰を入れたしたのは、六〇年代半ばごろからである。この時期に、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)が国際スポーツ社会に本格的に進出し始めている。六六年のワールドカップ・イングランド大会では、北朝鮮が強豪イタリアを破る金星を挙げ、世界中を驚かせた。この快挙に刺激を受けた韓国の大統領・朴正熙は、当時最

表一2 日本統治時代、日本の主要大会での朝鮮代表チームの優勝

<p>■明治神宮大会</p> <p>○一般の部</p> <p>35年 京城蹴球団</p> <p>39年 咸興蹴球団</p> <p>40年 咸興蹴球団</p> <p>41年 平壤日本穀物産業</p> <p>42年 平壤兵友</p> <p>○中等学校の部</p> <p>40年 中東中学</p> <p>41年 普成中学(神戸一中と両者優勝)</p>	<p>■全国中等学校蹴球選手権大会 (現、全国高校サッカー選手権大会)</p> <p>28年 平壤崇実中学</p> <p>40年 普成中学</p> <p>■全日本総合蹴球選手権</p> <p>35年 京城蹴球団</p> <p>■3地域対抗蹴球戦 (関東、関西、朝鮮)</p> <p>38年 朝鮮</p>
--	---

も権力のあったKCIA（韓国中央情報部）に陽地というチームを作り、国家代表の選手を集め、強化を図ったことがある。

陽地チームが結成された六六年には、ソウルのはずれの泰陵にスポーツ選手村が作られた。「韓国スポーツ揺籃の地」と言われる泰陵選手村が作られたきっかけは、東京オリンピックであった。隣国で開催された東京オリンピックに韓国は二百二十四人もの大選手団を派遣したが、銀二、銅一の結果に終わった。しかし、それ以上に衝撃的であったのは、日本スポーツの躍進であった。国を挙げて取り組んだこの大会で日本は金メダル十六個と、世界第三位の成績を収めた。中でも、体の小さい日本人が猛練習で世界を制した「東洋の魔女」、女子バレーボールの金メダルは、韓国にも多大な教訓を残した。「我々も世界で勝つには猛練習しかない」。韓国は、練習に打ち込める施設の必要性を痛感し、そこで作られたのが泰陵選手村というわけだ。当時、韓国の一人当たりの国民所得は百十ドルという貧困の中で、これだけスポーツに力を入れたのは、対外的に軍事政権に対する肯定的なイメージを与え、激しい対立関係にあった北朝鮮に対して優位な立場に立つには、スポーツでの活躍が効果的との認識が朴正熙政権内にあったからだ。

泰陵選手村で韓国は猛練習を重ね、七六年のモントリオールオリンピックでは、レスリングの梁正模が悲願であった、建国以来初の金メダルを獲得する。この金メダルは、韓国スポーツ界全体に活力を与え、韓国スポーツ躍進のきっかけになった。

八〇年のモスクワオリンピックは、旧ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議して、日韓ともにボイコットしている。国からの圧力でボイコットせざるを得なかった日本は、国からの財政的な独立の必要性を痛感し、当時の国際スポーツ界の潮流も相まって、商業主義化が進んでいく。対する韓国は八一年に、八六年のアジア大会、八八年のオリンピックの招致に相次いで成功し、「体育立国」のスローガンの下、ますます国がスポーツの強化を押し進めていった。その結果、八六年のアジア大会で韓国が初めて日本を追い越し、ソウルオリンピックでは、両国の差が決定的となった。

北朝鮮に対しても、スポーツにおける韓国は優位な立場に立ち、ソウルオリンピックでの南北統一チームへの期待も伴い、スポーツを通しての南北友好の機運が高まることとなる。九一年には、世界卓球選手権と世界ユースサッカーで南北統一チームが結成された。その後、交流が途絶えた時期もあったが、シドニーオリンピックの開会式では、南北の合同入場が実現している。

このように、激動の朝鮮半島情勢の中で、国威高揚の意味からも、交流促進の意味からもスポーツが果たす役割は大きく、それだけスポーツにおける政治の存在も大きくなった。加えて韓国人にとって、南北統一に次ぐ悲願は先進国の仲間入りである。オリンピックなどで韓国は、メダルの数よりも順位にこだわる。かつては、「体力＝国力」と盛んに言われ、最近はまだあまり言われなくなったものの、その考え方は根底に残っている。シドニーオリンピックの目標も、ロス五輪から続く「五

大会連続G10（総合十位以内）」である。

#### 4 変わる日韓のスポーツ環境

今まで述べてきた範囲では、日本と韓国のスポーツはかなり違うという印象を受けるかもしれない。しかし、両国のスポーツを支える体制はよく似ている。ともに、ヨーロッパ型のクラブ制度は未発達であり、学校と企業がスポーツを支えているからだ。

日本統治時代、朝鮮半島でも学校スポーツは盛んに行われ、その流れは今日でも変わらない。ただ日本と違うのは、韓国では儒教の影響もあり体を動かすことを良しとしない風潮があったうえに、解放後も貧困の中で、「スポーツで飯が食えるか」という現実があり、スポーツをする人があまりいなかったということだ。そこで、大学のスポーツ推薦制度を充実させ、オリンピックをはじめとする国際スポーツ大会のメダリストには年金などの報酬金を与えるという「特典」を設け、モチベーションを高める政策を打ち出してきた。これらの政策は、元はスポーツの底辺拡大を狙ったものだが、七〇年代、金メダルへの期待が高まる中で、スポーツのエリート化を加速させることとなった。ちなみに、高校のサッカーチームは、日本が約四千校であるのに対し、韓国は百校に過ぎない。

スポーツを支えるもう一方の主体である企業スポーツは、日本では高度経済成長とともに盛んになっていった。スポーツは会社の一休感を生むとともに、宣伝効果があると思われたからだ。韓国でも「漢江の奇跡」と呼ば

表-3 オリンピックでの日韓メダル数比較

	1948年 ロンドン			1952年 ヘルシンキ			1956年 メルボルン			1960年 ローマ			1964年 東京			1968年 メキシコ			1972年 ミュンヘン			1976年 モントリオール			1980年 モスクワ			1984年 ロサンゼルス			1988年 ソウル			1992年 バルセロナ			1996年 アトランタ		
	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅						
日本	不参加			1	6	2	4	10	5	4	7	7	16	5	8	11	7	7	13	8	8	9	6	10	不参加			10	8	14	4	3	7	3	8	11	3	6	5
韓国	0	0	2	0	0	2	0	1	1	0	0	0	0	2	1	0	1	1	0	1	0	1	1	4	不参加			6	6	7	12	10	11	12	5	12	7	15	5

れる高度経済成長の中で財閥が育つてくる  
と、少しずつ企業チームが誕生するようにな  
り、八〇年代の全斗煥政権の時代になると、  
政権の意向を受けて、財閥がスポーツを支援  
するようになった。韓国では、日本以上の政  
財癒着の体質にあったが、スポーツにおい  
ても、政財一体となって後押ししたわけだ。韓  
国の企業スポーツは、アマチュアと言われる  
スポーツでも、会社の仕事は一切しないなど、  
プロ的な色彩が濃い。

ただし、こうした企業スポーツは、不況に  
直面するとともに、危機を迎える。経営が苦  
しくなると、真っ先に切られるのが宣伝費だ  
からだ。朝日新聞の調べによれば、九一年か  
らの日本の企業スポーツの撤退は百七十七  
チームにも上るといふ。韓国は九七年末から  
深刻な経済危機に陥ったが、そのため約五十  
の企業チームが解体したという。韓国はもと  
もとチーム数が少ないので、影響は一層深刻  
である。

もう一つの柱である学校スポーツにして  
も、六・三・三・四制の学制の区切りの中で、  
一貫した指導ができない上に、中学、高校の  
短い期間に結果を求めるため、勝利至上主義  
となり、基礎がおろそかになるという問題を、  
日韓ともに抱えている。しかも、韓国ではま  
だそれほど深刻になっていないが、日本同様の  
少子化社会を韓国でも迎えることとなる。

さらに韓国では、民主化は政府と財閥の関  
係を変え、そのことが、必然的に政府とスポ  
ーツの関係を変えた。軍事政権時代のように、  
政権の意向によるトップダウンでスポーツを  
強化できなくなりつつあるわけだ。韓国のス

ポーツ界で最近よく言われるのが「エリート  
スポーツと生活体育（市民スポーツ）の並行  
発展」という言葉だ。トップ選手の活躍に刺  
激を受けて、スポーツ人口を増やす。底辺の  
拡大なしには、韓国スポーツの明日はない。

このように、日本も韓国もスポーツ環境の  
転換期の中で二〇〇二年のワールドカップを  
迎えることになる。見方を変えれば、この大  
会こそ、スポーツのあり方を考える好機とも  
言える。日本と韓国は、互いのスポーツ文化  
について語り合うことは、ほとんどなかった。  
しかし転換期の今こそ、互いに語り合える要  
素は確実に増えているように思う。

九三年のプロサッカー・Jリーグ開幕は、  
日本スポーツの常識を根底から変えるものだ  
った。従来の企業の宣伝部門という企業ス  
ポーツの位置づけから、独立法人として、地  
域に密着したクラブチームを目指す。傘下に  
ユースチームの設置も義務づけるなど、まさ  
に革命的と言っている内容だ。

Jリーグが誕生し、日本のサッカーが強く  
なったことは、韓国のスポーツ界も刺激した。  
韓国は日本より十年早くサッカーのプロリー  
グが始まったが、あくまでも企業チームであ  
った。近年地域密着を志向するようになり、  
まだ、クラブチーム結成とはいかないが、K  
リーグの各チームがいくつもの高校を援助し  
て、ユースチーム的な扱いで強化する制度を  
推進している。韓国にはドラフト制度がある  
が、Kリーグの各チームは、支援している高  
校の選手を優先的に入団させることができ  
る。こうした試みは、クラブ制度を確立する  
ための移行処置だとKリーグ関係者は言う。

日本と韓国の現状を考えれば、いきなり  
ヨーロッパ式のクラブ制度を完全に実施する  
と言っても、現実感に乏しいだろう。土地が  
狭い日韓の事情を考えれば、学校や企業のイ  
ンフラ活用は不可欠である。異質なもの共  
通項の多い日本と韓国はお互いに刺激し合  
い、スポーツ文化発展の新たなアイデアを出  
し合う時ではないだろうか。

日本と韓国は確かにアジアの中ではワール  
ドカップやオリンピックの出場をかけたライ  
バルだが、世界の中では、ともにアジアのス  
ポーツ、特にサッカーをリードしていくパー  
トナーである。二〇〇二年のワールドカップ  
も、アジアを代表して日本と韓国で開催する  
という視点も忘れてはならないだろう。

こうしてみていくと、二〇〇二年のワール  
ドカップは、ゴールではなくあくまでもス  
タートである。二十一世紀に向け、日本と韓  
国は試行錯誤を繰り返す中で、どのようなス  
ポーツ文化を築いていくことができるか。そ  
の部分に対する認識を高めていくことこそ、  
二〇〇二年ワールドカップというスタートを  
迎えるに当たり必要なことではないか。

併せて、横浜では世界が注目する決勝戦が  
行われる。サッカーの歴史に残るすばらしい  
決勝戦になることを願うとともに、決勝戦を  
開催した都市にふさわしいスポーツ文化を築  
いていくことも重要である。そして国際都市  
横浜が、サッカーをはじめとするアジアのス  
ポーツの交流の拠点になることを願ってい  
る。

△フリージャーナリスト▽

表-4 アジア大会での日韓メダル数比較

	1951年 ニューデリー			1954年 マニラ			1958年 東京			1962年 ジャカルタ			1966年 バンコク			1970年 バンコク			1974年 テヘラン			1978年 バンコク			1982年 ニューデリー			1986年 ソウル			1990年 北京			1994年 広島			1998年 バンコク		
	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅			
日本	24	21	15	38	36	24	67	41	30	74	57	24	78	53	33	74	47	23	69	49	47	70	59	49	57	52	44	58	76	71	38	60	76	64	75	79	52	61	68
韓国	不参加			7	6	5	8	7	12	4	9	10	12	18	21	18	13	23	16	26	15	18	20	31	28	28	37	93	55	76	54	54	73	63	56	64	65	47	52